

令和7年度
きのこ類の種菌の有害菌等調査関連業務
調査報告書

令和8年3月
一般財団法人 日本きのこ研究所

1. 事業の実施状況

本業務は、種苗法(平成 10 年法律第 83 号)に基づく指定種苗であるきのこ類の有害菌等の有無について確認・種別判定等の調査を行うものであり、令和 7 年 10 月 29 日に締結した請負契約書、および仕様書に準拠して実施した。

調査対象は、林野庁が種苗法に基づき検査のために種苗販売業者 10 事業者から収集し、当研究所に送付されたきのこの種菌等(表 1)を保存・培養し、林野庁に対して有害菌等の有無の判定に関する調査報告、及び適切な助言を行うことを目的とした。

なお、有害菌とは、種苗法施行規則(平成 10 年農林水産省令第 83 号)第 23 条第 3 項第 3 号の規定に基づき、農林水産大臣の指定する *Trichoderma* 属菌を指し、それ以外を害菌として説明する。

表 1 検査対象事業者および検査種菌等の一覧

都道府県	検査対象事業者	検査種菌等			検体番号	試験管番号
		形態	種類	数量		
■	■	袋菌床	しいたけ	12	A1~A12	A01~A12
■	■	袋菌床	なめこ	12	B1~B12	B01~B12
■	■	袋菌床	しいたけ	12	C1~C12	C01~C12
■	■	菌床	えのき	12	D1~D12	D01~D12
	■	菌床	しいたけ	12	E1~E12	E01~E12
■	■	菌床	しいたけ	12	F1~F12	F01~F12
■	■	種菌	なめこ	12	G1~G12	G01~G12
	■					
■	■	菌床	しいたけ	12	H1~H12	H01~H12
■	■	菌床	しいたけ	12	I1~I12	I01~I12
	■	菌床	しいたけ	12	J1~J12	J01~J12
8 県	10 種苗販売業者			120		

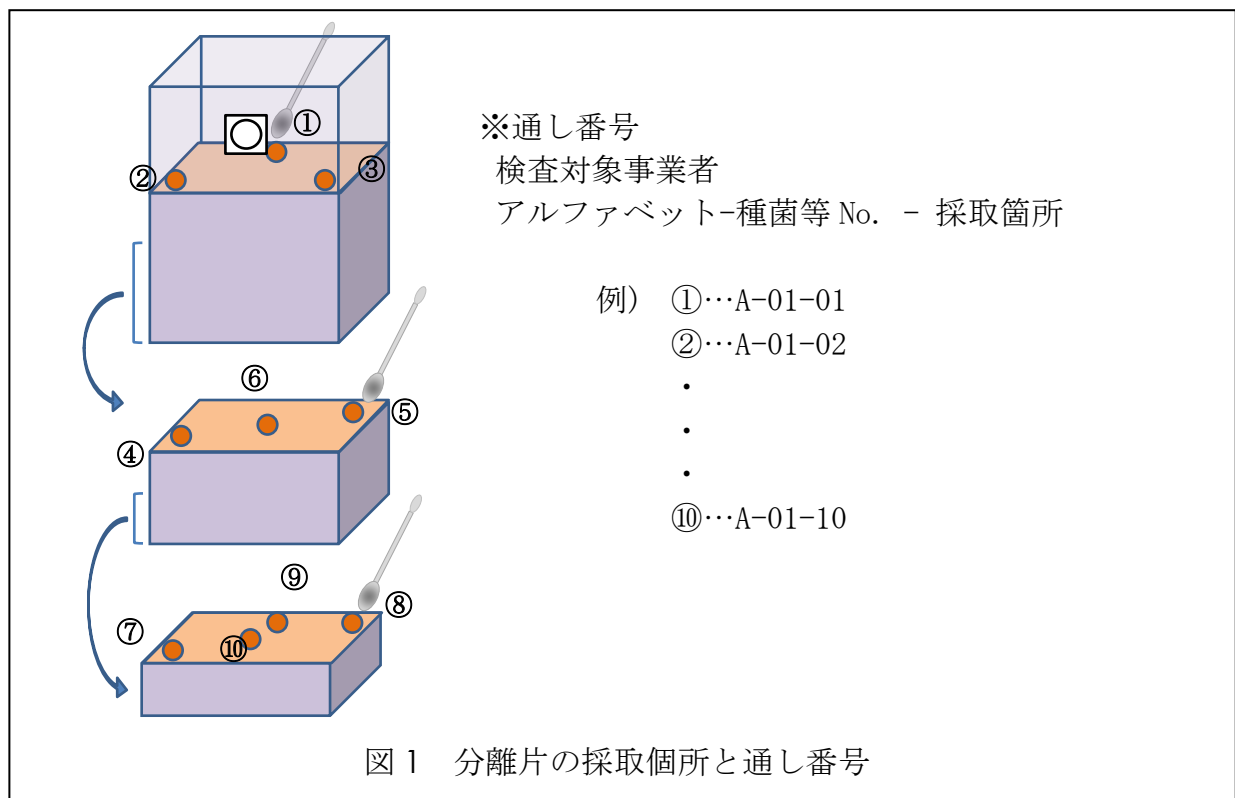
1) 調査内容と方法

(1) 送付された種菌等の消毒・保管

- ① 送付された種菌等の数量を確認し、容器の破損、菌叢表面の状態等を点検したのち、外側をエタノール消毒液で消毒した。
- ② 種菌等は保冷庫内(5~10℃)の整理棚に収納し、分離片の採取まで保管した。
- ③ 上記の作業途上で、目視によって菌叢の状態(異常の有無等)を確認した。
- ④ 分離片の採取は、種菌等の到着日、または到着から遅くとも5日以内に実施した。

(2) 寒天培地を用いた分離片採取・培養

- ① 分離用培地としては馬鈴薯・ブドウ糖寒天培地(Difco社製、以下、PDA培地と称す)を用いた。なお、いずれも試験管に約10ml分注し、オートクレーブ殺菌(120℃、20分間)して供試した。
- ② 種菌等の分離片採取は、クリーンルーム内のクリーンベンチ(無菌作業台、清浄度:クラス100以上)で実施した。ピンセット、エーゼ等の分離器材は、種菌等を1片分離する都度、アルコール殺菌、および火炎殺菌を行った。
- ③ 種菌等のPDA培地による分離片は、1検体から上面(3隅各1点、計3点)と中断面(2隅各1点、および中央部1点、計3点)、下断面(3隅各1点、および中央部1点、計4点)の合計10点を採取した。試験管には分離箇所と対応するよう、通し番号(A-01-01、A-01-02、A-01-03・・・)をつけた(図1)。
- ④ 分離片の培養は、接種した試験管を培養室(25℃)で14日間行った。



(3) 培養期間中の点検・調査

培養期間中の点検・調査は、おもに有害菌等の発生の有無(菌糸の生長状況、及び色の変化等)を中心に、分離から2~4日目、6~8日目、9~11日目、14日目の計4回行った。なお、最終点検・調査が終了したそれぞれの試験管は、5℃の保冷庫で保管した。

(4) 異常菌糸が発生した場合の菌の判定、及び有害菌等の同定

分離片から異常菌糸が発育した試験管については、光学顕微鏡等による観察を行った。なお、有害菌等の属の分類・同定は、基本的にはスライドカルチャー方式によって得た菌糸体を供試し、光学顕微鏡を用いて行った。

2) 調査結果

(1) 有害菌等調査関連業務のフローチャート

林野庁によって種苗販売業者 10 事業者から有害菌等調査のために収集され、当研究所に送付されたきこの類の種菌等について、その受入れ、分離、および調査等に関する作業日程のフローチャートを表2に示す。

種菌等各部位からの分離片採取は、種菌等の到着日、または遅くても到着後5日以内に実施した。調査は分離から2~4日目、6~8日目、9~11日目、14日目の計4回行った。

表2 有害菌等調査関連業務のフローチャート

検査対象事業者									
検体番号	試験管番号	都道府県	名称(略)	きのこの種類	数量	培地作製日	受入日	分離日	最終調査日
A	A	■■■■	■■■	しいたけ	12	10/31	11/10	11/10	11/24
B	B	■■■■	■■■	なめこ	12		11/19	11/20	12/4
C	C	■■■■	■■■	しいたけ	12	11/12	11/20	11/21	12/5
D	D	■■■■	■■■	えのき	12		12/5	12/8	12/22
E	E	■■■■	■■■	しいたけ	12	11/27	12/8	12/9	12/23
F	F	■■■■	■■■	しいたけ	12		12/11	12/12	12/26
G	G	■■■■	■■■	なめこ	12	1/7	1/15	1/16	1/30
H	H	■■■■	■■■	しいたけ	12		1/16	1/19	2/2
I	I	■■■■	■■■	しいたけ	12	1/15	1/23	1/26	2/9
J	J	■■■■	■■■	しいたけ	12		1/26	1/27	2/10

(2) 有害菌等の分離結果

培養中の点検・調査は、分離から2～4日目、6～8日目、9～11日目、14日目の計4回行い、分離培地からの菌糸の生育状況、及び有害菌等の混入の有無・菌叢の色の変化等について観察した。4回の点検・調査のいずれかで有害菌等が検出された試験管については、14日目の最終調査時にその有害菌等がきのこ菌に覆われた場合も含めて「検出」とし、その結果を表3に示す。

表3 調査結果

検査対象事業者				きのこの種類	数量	有害菌および害菌の有無と場所			
検体番号	試験管番号	都道府県	名称(略)			検出・非検出	上面	中断面	下断面
A	A	■	■	しいたけ	12	検出	4床10点	×	×
B	B	■	■	なめこ	12	検出	3床5点	×	×
C	C	■	■	しいたけ	12	検出	1床3点	×	×
D	D	■	■	えのき	12	検出	11床30点	×	×
E	E	■	■	しいたけ	12	検出	10床30点	2床3点	×
F	F	■	■	しいたけ	12	検出	4床5点	×	×
G	G	■	■	なめこ	12	非検出	×	×	×
H	H	■	■	しいたけ	12	非検出	×	×	×
I	I	■	■	しいたけ	12	検出	2床6点	×	×
J	J	■	■	しいたけ	12	非検出	×	×	×

×：有害菌等の非検出。

(3) 害菌の種類

検出された害菌の種類と、検出された試験管番号の詳細を表 4 および表 5 に示す。

表 4 害菌の種類と、検出された試験管番号の詳細

検体番号	試験管番号	名称(略)	検出された害菌	検出された試験管番号
A	A	■	<i>Paecilomyces</i> sp.	A-01-01, 02
			<i>Cladosporium</i> sp.	A-05-01, 02, 03 A-12-01, 02
			<i>Penicillium</i> sp.	A-11-01, 02, 03
B	B	■	<i>Penicillium</i> sp.	B-04-01 B-06-02
			<i>Aspergillus</i> sp.	B-06-03
			<i>Cladosporium</i> sp.	B-06-01 B-12-02
C	C	■	<i>Penicillium</i> sp.	C-01-01, 02, 03
D	D	■	<i>Penicillium</i> sp.	D-01-01 D-03-01, 02, 03 D-04-01, 02, 03 D-05-01, 02, 03 D-06-01, 02, 03 D-07-01, 02, 03 D-08-01, 02, 03 D-09-01, 02, 03 D-10-01, 02, 03 D-11-01, 02, 03 D-12-01, 03

表5 害菌の種類と、検出された試験管番号の詳細

検体番号	試験管番号	名称(略)	検出された害菌	検出された試験管番号
E	E	■■■■■	<i>Penicillium</i> sp.	E-01-01, 02, 03 E-02-01, 02, 03 E-03-01, 02, 03 E-04-01, 02, 03, 05, 06 E-05-01, 02, 03, 04 E-06-01, 02, 03 E-07-01, 02, 03 E-08-01, 02, 03 E-09-01, 02, 03 E-10-01, 02, 03 E-11-01, 02, 03 E-12-01, 02, 03
			Bacteria	E-01-02
			<i>Purpureocillium</i> sp.	E-01-03 E-08-02
			<i>Aspergillus</i> sp.	E-04-01, 02, 03
			<i>Geotrichum</i> sp.	E-05-02, 03
F	F	■■■■■	<i>Penicillium</i> sp.	F-01-01 F-08-01 F-11-02 F-12-01, 03
I	I	■■■■■	<i>Penicillium</i> sp.	I-03-01, 02, 03 I-12-01, 02, 03

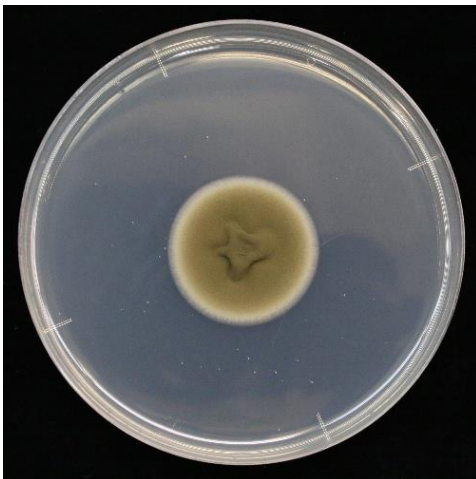
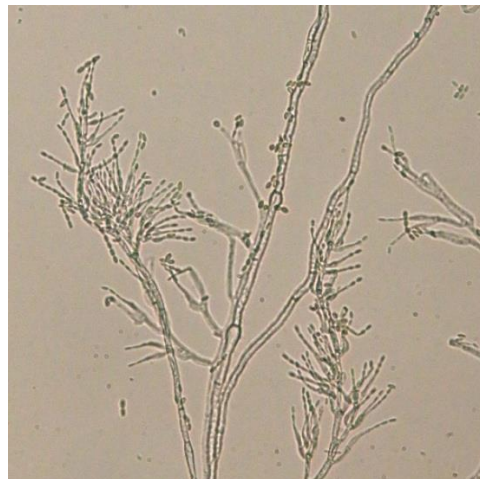
光学顕微鏡による調査の結果、害菌とされる *Paecilomyces* 属菌、*Cladosporium* 属菌、*Penicillium* 属菌、*Aspergillus* 属菌、Bacteria、*Purpureocillium* 属菌および *Geotrichum* 属菌が検出された。なお有害菌とされる *Trichoderma* 属菌はいずれの事業者の検体からも検出されなかった。

分離された害菌の PDA 培地上での写真、および分生子柄、分生孢子等の顕微鏡

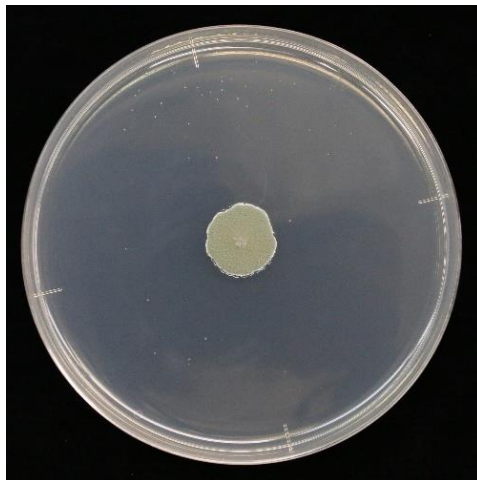
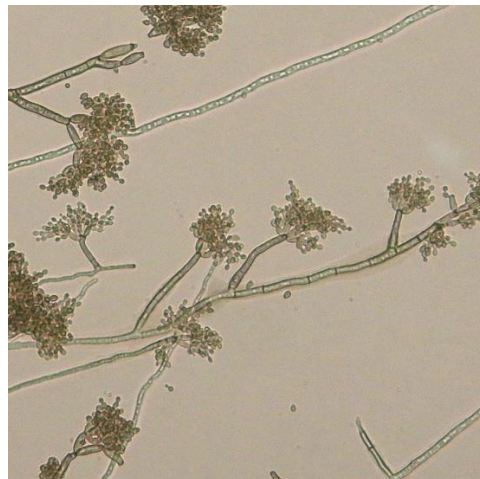
写真を図 2～9 に示す。



Paecilomyces 属菌 (検体番号 A-1)



Cladosporium 属菌 (検体番号 A-5)



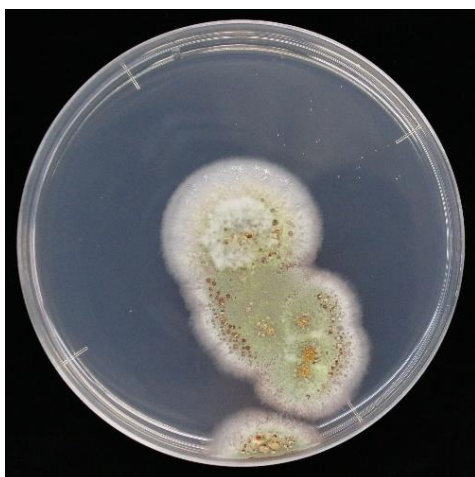
Penicillium 属菌 (検体番号 A-11)



図 2 分離された害菌の菌叢および顕微鏡写真



Penicillium 属菌 (検体番号 B-4)

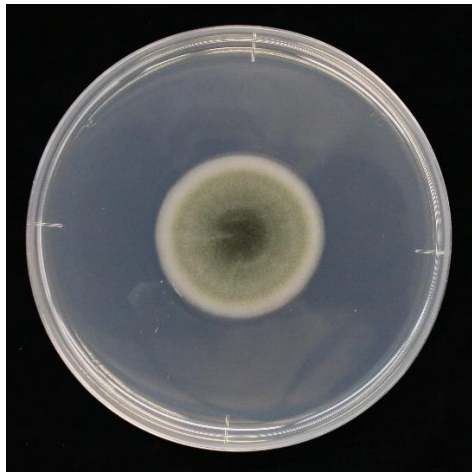


Penicillium 属菌 (検体番号 B-6)

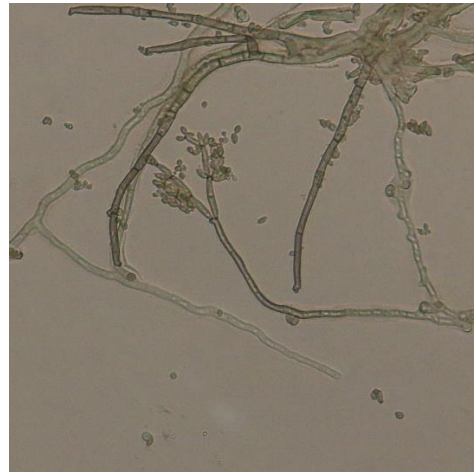


Aspergillus 属菌 (検体番号 B-6)

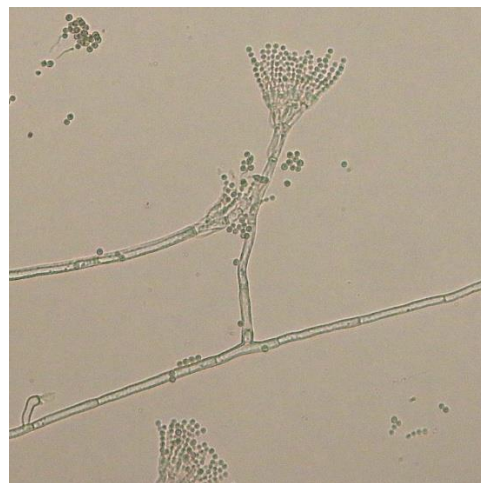
図3 分離された害菌の菌叢および顕微鏡写真



Cladosporium 属菌 (検体番号 B-6)



Cladosporium 属菌 (検体番号 B-12)

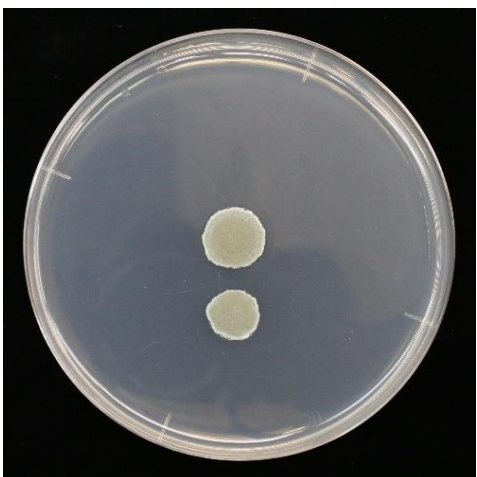


Penicillium 属菌 (検体番号 C-1)

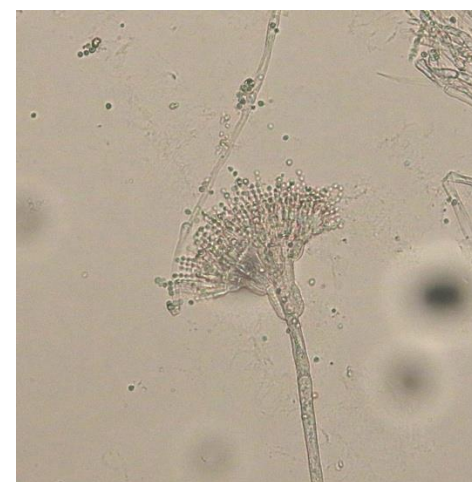
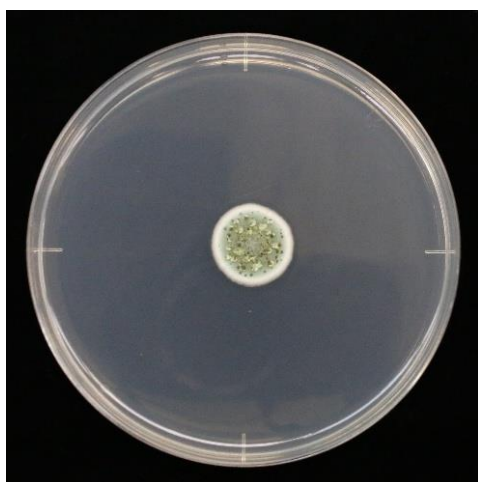
図4 分離された害菌の菌叢および顕微鏡写真



Penicillium 属菌 (検体番号 D-8)

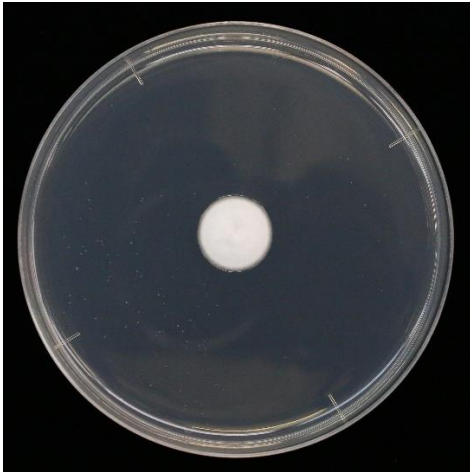


Penicillium 属菌 (検体番号 D-8)

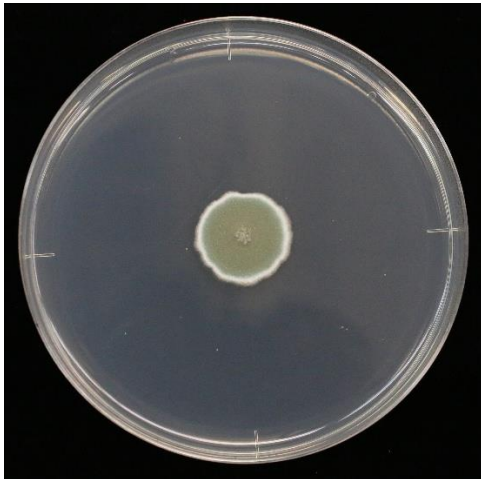


Penicillium 属菌 (検体番号 D-9)

図5 分離された害菌の菌叢および顕微鏡写真



Penicillium 属菌 (検体番号 E-3)

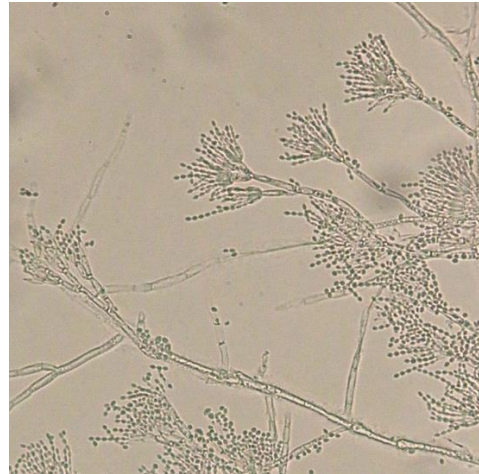
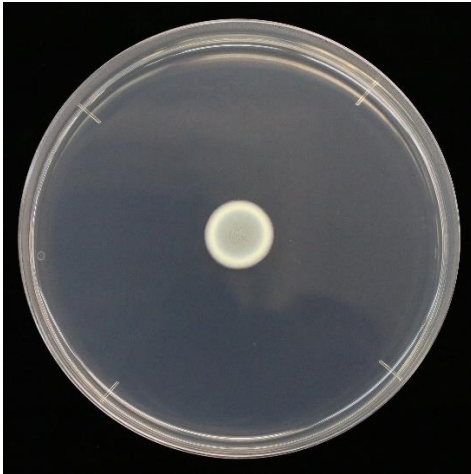


Penicillium 属菌 (検体番号 E-4)

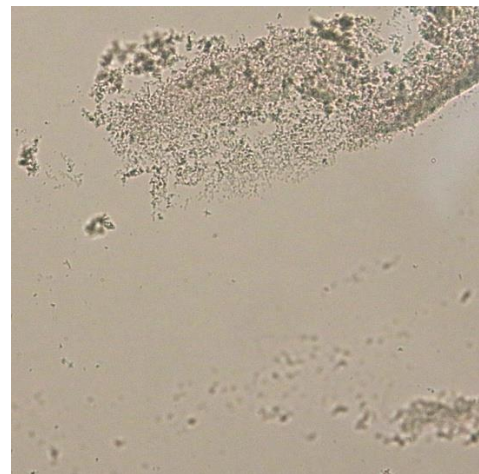


Penicillium 属菌 (検体番号 E-5)

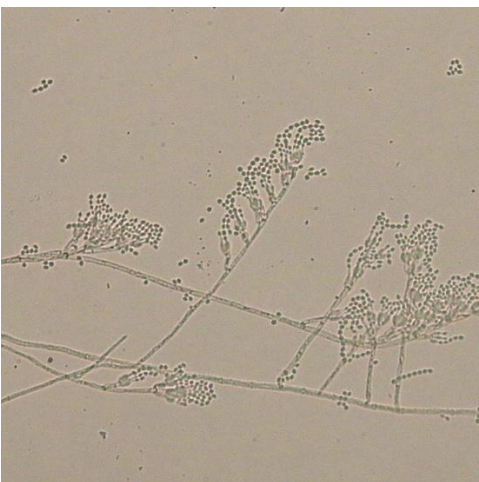
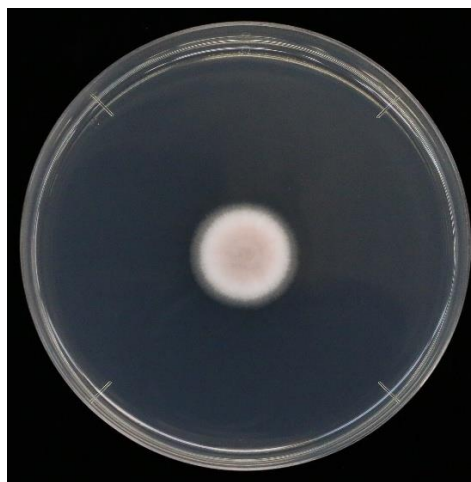
図6 分離された害菌の菌叢および顕微鏡写真



Penicillium 属菌 (検体番号 E-5)

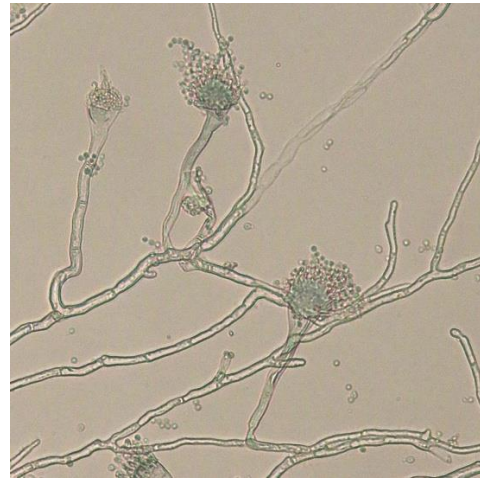
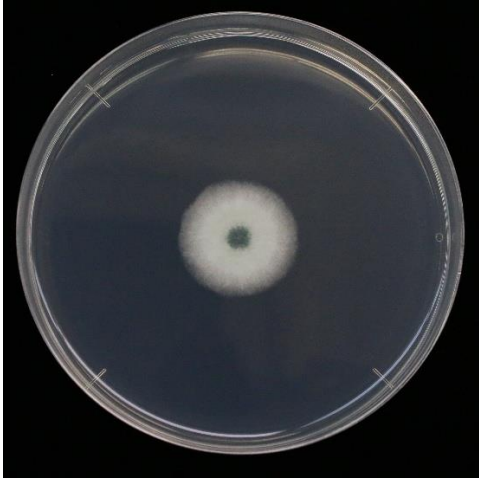


Bacteria (検体番号 E-1)

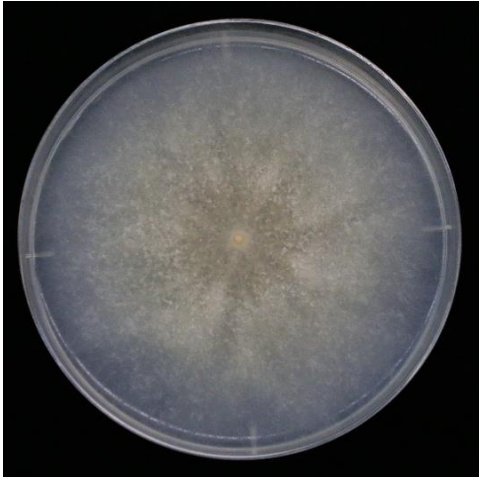


Purpureocillium 属菌 (検体番号 E-1)

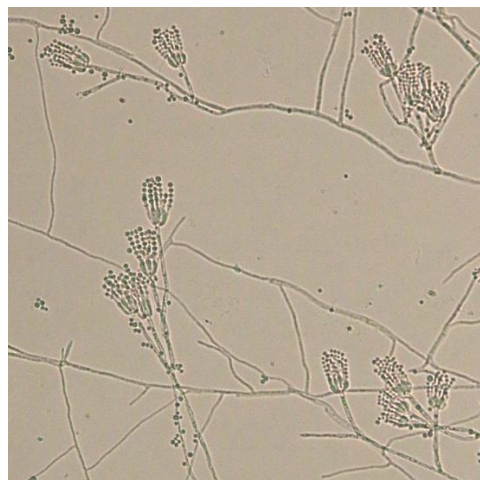
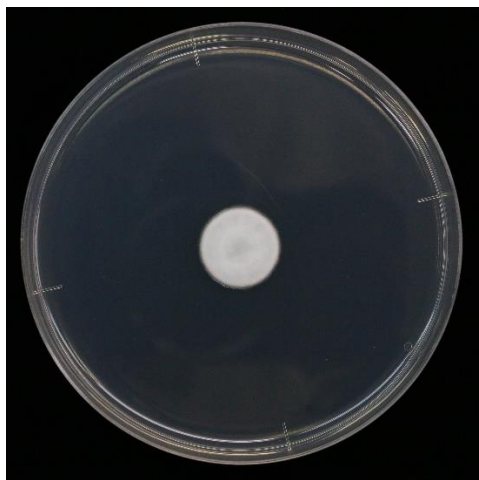
図7 分離された害菌の菌叢および顕微鏡写真



Aspergillus 属菌 (検体番号 E-4)



Geotrichum 属菌 (検体番号 E-5)



Penicillium 属菌 (検体番号 F-12)

図8 分離された害菌の菌叢および顕微鏡写真



Penicillium 属菌 (検体番号 F-12)



Penicillium 属菌 (検体番号 I-12)

図9 分離された害菌の菌叢および顕微鏡写真







(4) 発生原因に関する考察

害菌の汚染が確認された分離片の位置、その種類、受け入れた種菌等の状態、および担当者の過去の経験等を加味し、害菌の発生原因を総合的に判断するとともに、若干の考察を加えた(表6)。なお、栽培現場の様子や作業手順等については不明な部分もあり、考察(原因とその対策)は推測を含むものである。

表6 発生原因に関する考察

検体番号	検査対象事業者 (きのこの種類)	発生原因に関する考察 〔観察結果、原因、および対策〕
A	[Redacted]	〔観察結果〕 12床のうち、1床の上面2点から <i>Paecilomyces</i> 属菌、2床の上面5点から <i>Cladosporium</i> 属菌、1床の上面3点から <i>Penicillium</i> 属

	(しいたけ)	<p>菌が検出された。</p> <p>また、そのうち 1 床(A-11)では菌床上面にカビを目視確認した(図 10)。</p> <p>〔原因と対策〕</p> <p>送付された菌床はしいたけ菌糸が培地全体に蔓延した状態であった。害菌は内部(中断面や下断面)からは検出されず、上面から検出された。したがって、害菌は培養中に袋内に侵入し種菌上面の乾燥によりしいたけ菌糸の活力が低下したところに付着したものと考えられる。今回の検体ではシール不良のものが見られたため、侵入経路はシール部と考えられる。</p> <p>検体のヒートシールは二重に施されているため、シールが一重の場合よりもシール不良のリスクは低い。それでも菌床の詰込殺菌時に付着したオガや結露水でシール不良になる場合があり、完全には防ぎきれない。そのような場合、害菌対策としては培養室の清浄度の保持が最も重要である。具体的には、定期的な換気扇や空調機等の点検、清掃、及び培養室の床や壁面の洗浄、消毒を行うことで培養室内に存在する有害菌等を少なく保ち、累積汚染を防ぐことが重要である。また、移動時などにシール不良に気づいた場合は再度ヒートシールを施して害菌の侵入経路を塞ぐことも有効である。</p>
B	<p>■■■■■</p> <p>■■■■■</p> <p>(なめこ)</p>	<p>〔観察結果〕</p> <p>12 床のうち、2 床の上面 2 点から <i>Penicillium</i> 属菌、2 床の上面 2 点から <i>Cladosporium</i> 属菌、1 床の上面 1 点から <i>Aspergillus</i> 属菌が検出された。</p> <p>また、袋内部や子実体にカビが付着している様子が確認された(図 11、図 12)。</p> <p>〔原因と対策〕</p> <p>送付された菌床は、なめこ菌糸が培地全体に蔓延し子実体を形成しており、長期にわたって培養されたものと考えられる。菌床上部から害菌が検出されたことから、害菌の侵入は蔓延後と考えられる。</p> <p>一般的に培養中の害菌の侵入経路としては、フィルター、ヒートシール不良、ピンホールが考えられる。検体のヒートシールは二重に施されており、正確にシールされていたためシール不良の可能性は低い。またピンホールも認められなかった。一般に菌床袋のフィルターは通気を確保するために目が粗くつくられている。したがって今回の侵入経路はフィルターからと考えられる。</p> <p>対策としては、培養環境を清潔に保ち、フィルター表面に付着する落下菌の数を減らすことが重要である。具体的には、定期的な換気扇や空調機等の点検、清掃、及び培養室の床や壁面の洗浄、消毒を行うことで培養室内に存在する有害菌等を少なく保ち、累積汚</p>

		染を防ぐことが重要である。また、シール不良も害菌の侵入経路となりうるため、もし移動時等にシール不良に気づいた場合は再度ヒートシールを施して害菌の侵入経路を塞ぐことも有効である。
C	  (しいたけ)	<p>〔観察結果〕</p> <p>12床のうち、1床の上面3点から <i>Penicillium</i> 属菌が検出された。</p> <p>〔原因と対策〕</p> <p>送付された菌床はしいたけ菌糸が培地全体に蔓延し原基を形成していたことから培養が完了しているものと考えられる。菌床上面の害菌はしいたけ菌糸の蔓延後に侵入したのと考えられる。一般に培養段階の侵入経路はフィルター、ヒートシール部、ピンホールいずれかである。受け取った検体のなかにはシール不良のものもあったが(図13)、害菌の検出された検体(C-1)ではシール不良やピンホールは確認できなかった。これらの状況から、今回の害菌はフィルターから侵入したと考えられる。</p> <p>一般にフィルターは通気を確保するため粗くつくられている。したがって害菌対策としては、培養環境を清潔に保ち、フィルター表面に付着する落下菌の数を減らすことが重要である。具体的には、定期的な換気扇や空調機等の点検、清掃、及び培養室の床や壁面の洗浄、消毒を行うことで培養室内に存在する害菌を少なく保ち、累積汚染を防ぐことが重要である。また、シール不良も害菌の侵入経路となりうるため、移動時等にシール不良に気づいた場合は再度ヒートシールを施して侵入経路を塞ぐことも重要である。</p>
D	  (えのき)	<p>〔観察結果〕</p> <p>12床のうち、11床の上面30点から <i>Penicillium</i> 属菌が検出された。</p> <p>そのうち1床では蓋の内側にカビが目視で確認された(図14)。</p> <p>〔原因と対策〕</p> <p>送付された菌床は、菌糸が7割程度蔓延し、未蔓延部分が残る状態であった。瓶上面からのみ害菌が検出されたことから、培養中に害菌が侵入したと考えられ、その侵入経路として瓶と蓋の嵌合部や蓋のフィルター部が考えられる。菌床の外側には培地の汚れが確認された(図15)。これらの乾いた培地に害菌が繁殖し、培養室や瓶外側は害菌の多い状態だったと考えられ、これが瓶蓋から侵入したと考えられる。</p> <p>対策としては、培養施設を定期的に清掃することである。落ちている培地を除去することで害菌の繁殖源を減らすこと、さらに培養室の床や壁面を消毒して害菌等を少なく保つことが重要である。</p>
E	 	<p>〔観察結果〕</p> <p>12床のうち、12床の上面36点と中断面3点から <i>Penicillium</i> 属</p>

	<p>■(しいたけ)</p>	<p>菌が、1床の上面1点から <i>Bacteria</i> が、2床の上面2点から <i>Purpureocillium</i> 属菌が、1床の上面3点から <i>Aspergillus</i> 属菌が、1床の上面2点から <i>Geotrichum</i> 属菌が検出された。</p> <p>検体の受け入れ時に多くの検体で袋の内側にカビやバクテリアが観察され(図16)、分離時にも複数の検体で上面にカビが観察された(検体2,3,4,5,7,8,9,12)(図17、図18)。</p> <p>〔原因と対策〕</p> <p>送付された菌床はしいたけ菌糸が培地全体に蔓延し原基形成しており培養が完了したものと考えられる。主に菌床上面に害菌が検出されたことから、しいたけ菌糸が蔓延したあとに害菌が侵入したと考えられ、その侵入経路としてヒートシール部やフィルターが考えられる(図19、図20)。なお中断面からも害菌が検出されたが、これは上面の孢子が分離時に舞って中断面に付着したものと考えられる。</p> <p>菌床を横向きや下向きにして、菌床から出た褐色水を袋上部に溜める方法の培養では、褐色水がフィルターやシールに触れるため、培養室内の害菌が袋内に侵入しやすい傾向にある。害菌対策としては培養室の清浄度の保持が重要である。具体的には、定期的な換気扇や空調機等の点検、清掃、及び培養室の床や壁面の洗浄、消毒を行うことで培養室内に存在する有害菌等を少なく保ち、累積汚染を防ぐことが重要である。</p>
F	<p>■ ■ ■(しいたけ)</p>	<p>〔観察結果〕</p> <p>12床のうち、4床の上面5点から <i>Penicillium</i> 属菌が検出された。</p> <p>〔原因と対策〕</p> <p>送付された菌床はしいたけ菌糸が培地全体に蔓延した状態であった。菌床上面の乾燥によりしいたけ菌糸の活力が低下したところに害菌が付着したものと考えられる。袋のヒートシール部分に細かいオガが多数咬んでいたため(図21)、害菌の侵入経路は主にシール部からと考えられる。</p> <p>菌床上面の害菌対策は培養室の清浄度の保持である。具体的には、定期的な換気扇や空調機等の点検、清掃、及び培養室の床や壁面の洗浄、消毒を行うことで培養室内に存在する有害菌等を少なく保ち、累積汚染を防ぐことが重要である。</p>
I	<p>■(しいたけ)</p>	<p>〔観察結果〕</p> <p>12床のうち、2床の上面6点から <i>Penicillium</i> 属菌が検出された。また、そのうち1床では上面に緑色のカビが観察された(図22)。</p> <p>〔原因と対策〕</p> <p>送付された菌床はしいたけ菌糸が培地全体に蔓延し、原基形成していたことから、培養完了しているものと考えられる。菌床上面の乾燥によりしいたけ菌糸の活力が低下したところにフィルターから害</p>

		<p>菌が侵入、付着したものと考えられる。</p> <p>一般に、培養の経過と共に菌床上面の乾燥が進み、菌床上面のシイタケ菌の活力が低下することで害菌が付着、繁殖しやすい環境となる。菌床上面の害菌繁殖の対策は培養室の清浄度の保持である。具体的には、定期的な換気扇や空調機等の点検、清掃、及び培養室の床や壁面の洗浄、消毒を行うことで培養室内に存在する有害菌等を少なく保ち、累積汚染を防ぐことが重要である。</p>
	<p>まとめ</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 10事業者、120の種菌等を供試し、有害菌類の有無を調査したところ、7事業者の菌床から害菌の検出が認められた。 2. 有害菌として指定されている <i>Trichoderma</i> 属菌は検出されなかった。 3. 菌床上面の汚染の原因は、長期培養により菌床上面が乾燥してきたこの菌糸の活力が低下しているため害菌が付着して繁殖したためと推察された。中断面の汚染は分離時に上面のカビの胞子が舞って中断面に付着したものと考えられる。 4. 害菌等の汚染防除の対策としては、培養室の清掃や消毒の徹底、培養に適した環境制御、接種作業の再点検、菌床移動作業工程、菌床移動などにかかわる設備の再点検が考えられる。

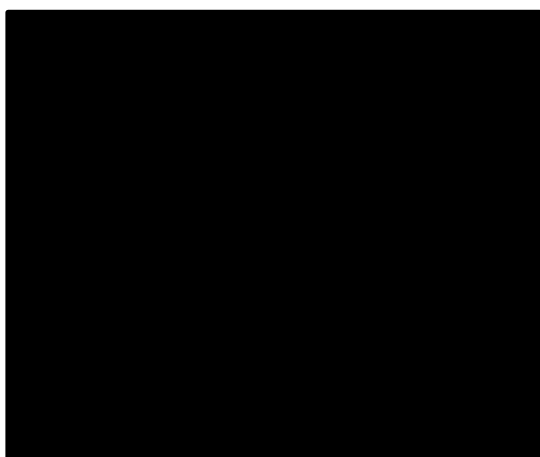


図 10 [Redacted]



図 11 [Redacted]



図 12 [Redacted]



図 13 [Redacted]



図 14 [Redacted]



図 15 [Redacted]

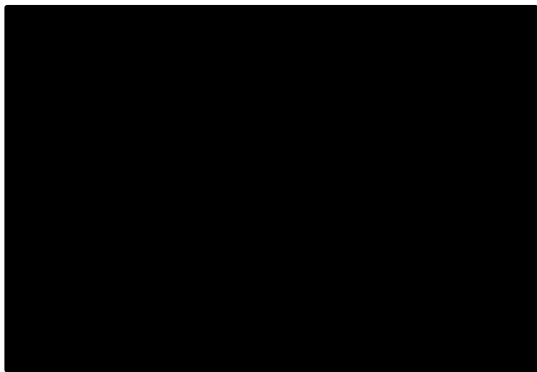


図 16 [Redacted]

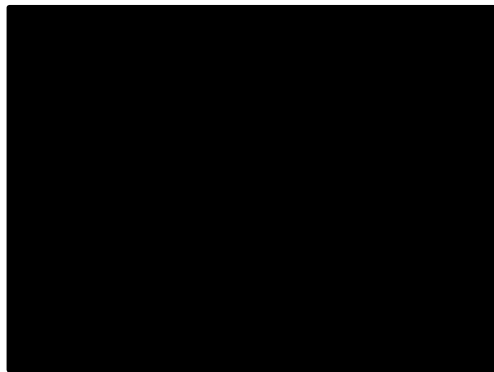
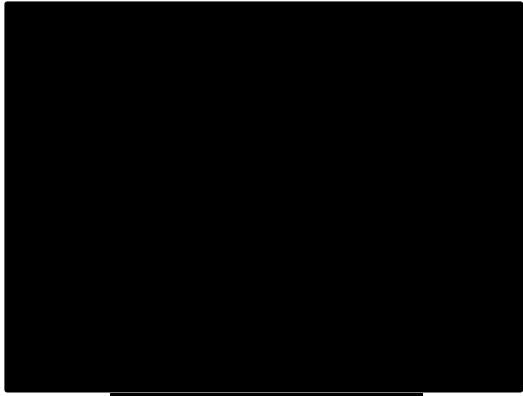


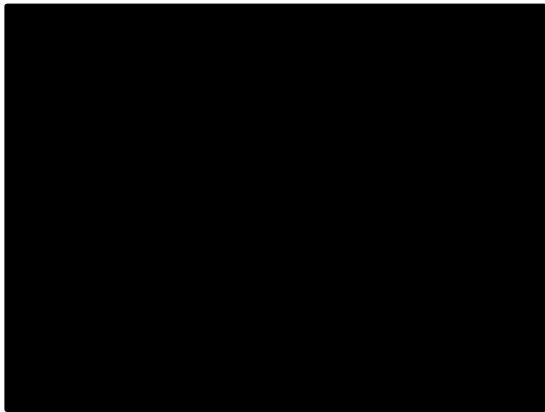
図 17 [Redacted]



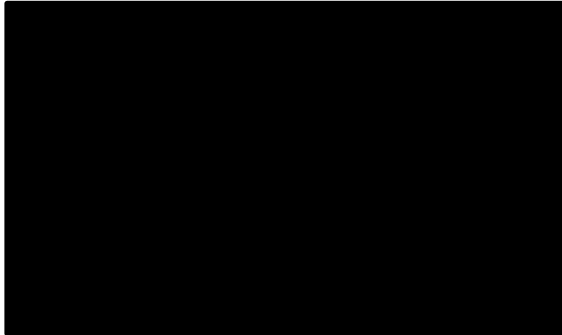
☒ 18 [Redacted]



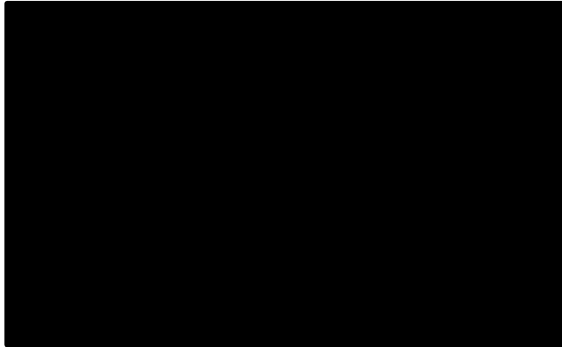
☒ 19 [Redacted]



☒ 20 [Redacted]



☒ 21 [Redacted]



☒ 22 [Redacted]

(5) 検出された害菌の特徴

検出された *Paecilomyces* 属菌、*Cladosporium* 属菌、*Penicillium* 属菌、*Aspergillus* 属菌、*Bacteria*、*Purpureocillium* 属菌および *Geotrichum* 属菌のそれぞれの特徴を表 7 に示す。

表 7 検出された害菌の特徴

種類	特徴
<i>Paecilomyces</i> 属菌	<p>世界中の土壤に分布し、森林土壤、木材、穀類、果実・野菜、果実加工品、その他の加工食品などから検出される。</p> <p>接種時など早い段階で培地内に混入した場合は、きのこの菌糸が生育する前に培地内にまん延するため、きのこの菌糸との栄養上の競合がおこり、子実体発生の遅れ、発生量の低下等の原因となる場合がある。一方、きのこの菌糸に対する侵害力は弱いため、培養途上に混入した場合は、しいたけ菌の不良環境等による活力の著しい低下がなければ大きな問題となることは少ない。</p>
<i>Cladosporium</i> 属菌	<p>世界中に分布する不完全菌である。土壤、穀類、野菜等から検出される。野外では植物遺体を中心に検出される。空中浮遊菌として 30～40%(PDA 培地での検査)を占める。</p> <p>PDA 培地でのコロニー生育は比較的遅く、暗緑色～オリーブ黒色である。裏面は黒色。暗色、滑面、直立した分生子柄の先端が出芽して樹上に分岐し、長い連鎖になる。分生子形成は出芽型。分生子は 1～2 細胞、淡褐色～暗褐色、楕円形～レモン形、滑面または粗面。わずかなショックで連鎖が壊れ、中間の枝状の部分も含めてばらばらになる。</p> <p>きのこの栽培施設での落下菌検査では高い確率で検出される。特に、接種室や放冷室で検出される。接種時など早い段階で培地内に混入した場合は、きのこの菌糸との栄養上の競合がおこり、子実体発生の遅れ、発生量の低下等の原因となる場合がある。一方、培養途上に混入した場合は、しいたけ菌の不良環境等による活力の著しい低下がなければ大きな問題となることは少ない。</p>
<i>Penicillium</i> 属菌	<p>アオカビ(青かび)と呼ばれ、最も普遍的にみられる不完全菌。胞子が青みを帯びていることからその名前がつけられたが、種類によって色彩は白色、黄緑色、青緑色、灰緑色などさまざまである。</p> <p>土壤、圃場菌類として生鮮果実・野菜など、貯蔵菌類として農産物、食品原材料、加工食品などに発生し、しばしばきのこの栽培の培地にも混入する。きのこの栽培培地の場合は、ある程度熟度が進み、菌床表面が乾燥し、菌糸の活力が低下した場合に付着、定着し、高湿度環境で成長、発生する。</p> <p>きのこの菌糸を殺傷することはないが、繁殖した胞子が空気中を漂いやすい(伝播能力が高い)ため、培地内部への混入率がきわめて高い。接種時など早い段階で培地内に混入した場合は、きのこの菌糸</p>

	<p>が生育する前に培地内にコロニーを形成するため、きのこの菌糸との栄養競合がおこり、子実体発生の遅れ、発生量の低下等の原因となる場合がある。一方、培養途上に混入した場合は、しいたけ菌の不良環境等による活力の著しい低下がなければ大きな問題となることはない。</p> <p><i>Penicillium</i> 属菌は、無菌的な配慮が不十分な培養室等には多量に空中浮遊する害菌である。</p>
<i>Aspergillus</i> 属菌	<p>世界中に広く分布する不完全菌で、コウジカビ(麹かび)とも呼ばれる。古くなったパンや餅などに生えることが多い。</p> <p>土壌、貯蔵菌類として各種の農産物(穀類、穀類加工品、マメ類、ナッツ類、香辛料など)、常温流通の各種食品、加工食品、糖分の多い食品などから検出される。きのこ栽培における害菌としても知られており、室内環境での増殖は喘息などのアレルギー性疾患と関係するといわれる。</p> <p>きのこ栽培においては、栄養競合型の害菌であり、きのこの菌糸を殺傷する能力はない。なお、この仲間の一部は、麹として味噌や醤油、日本酒(<i>Aspergillus oryzae</i>)を作るために用いられている。この仲間にはヒトに感染して病気を起こすもの、および <i>Aspergillus flavus</i> などアフラトキシン(カビ毒)産生菌なども知られている。</p> <p>無菌的な配慮が不十分な接種室や培養室では、きのこの培地に混入する場合もあるが、一般的には <i>Penicillium</i> 属菌ほど多くはない。</p>
Bacteria	<p>生物圏とされているほぼ全ての環境に生息する。土壌や湖沼はもちろん、上空 8,000m までの大気圏、熱水鉱床、水深 11,000m の海底、南極の氷床などといった、生物にとって過酷な環境でも生育ないし存在が確認されている。しかし、生育には水分が必須であり乾燥に対しては極めて弱い。</p> <p>通常温度条件で、しいたけ菌が健全な状態であれば、Bacteria による被害はほとんど見られない。しかし、高温・加湿状態が続くしいたけ菌の活力が著しく低下すると Bacteria に汚染され、発生した子実体が腐敗することがある。また、水を介して感染し、被害が拡大するため、加湿機や結露水には注意する必要がある。</p>
<i>Purpureocillium</i> 属菌	<p>土壌や大気中に分布する。人の体温でも生育できるため、日和見感染症に注意が必要である。</p> <p>接種時など早い段階で培地内に混入した場合は、きのこの菌糸が生育する前に培地内にまん延するため、きのこの菌糸との栄養上の競合がおこり、子実体発生の遅れ、発生量の低下等の原因となる可能性がある。また、アミガサタケ栽培においてはアミガサタケの原基に感染すると生育不良を起こすことが知られている。</p>
<i>Geotrichum</i> 属菌	<p>世界中に分布。土壌、河川、穀類、マメ類、生鮮果実、野菜、果汁、冷凍食品、乳製品、飲料などから検出され、きのこの発生施設においては落下菌検査で低頻度であるが検出される。</p>

	接種時など早い段階で培地内に混入した場合は、きのこの菌糸が生育する前に培地内にまん延するため、きのこの菌糸との栄養上の競合がおり、子実体発生の遅れ、発生量の低下等の原因となる可能性がある。
--	--

3) 調査後の種菌等の保管と処分

調査後の種菌等については、林野庁担当者の了解を得て廃棄処分を行った。害菌を検出した培地は、殺菌後に容器と培地を類別したのち、培地部分は堆肥化して廃棄処分した。害菌を検出していない培地は、容器と培地を類別したのち、培地部分は堆肥化して廃棄処分した。

2. 担当者

林野庁から送付されたきのこの類の種菌等からの分離片採取、および害菌の確認調査については、当研究所に組織したチームで実施した(表 8)。

判定に関する調査報告書、及び助言の内容については、チーム内で十分検討を加えたのちに作成した。

表 8 担当者一覧

担当者		主な業務
■	■	菌叢観察、報告書作成
■	■	分離、菌叢観察、報告書作成
■	■	分離、菌叢観察、菌株保存 報告書作成
■	■	培地作製、経理事務
■	■	菌株の分類・同定